

言葉の有限性と可能性について

本田 弘 治*

Über die Beschränktheit und die Möglichkeit von der Sprache

Koji HONDA

要 旨

我々は様々な事柄の意味を了解し、それを言葉によって思索し、表現している。言葉はそれゆえ、意味と了解の構造を表すものである。すなわち、言葉は我々の了解の仕方に従った構造をしているはずである。

しかし、我々が言葉を習得するとき、我々は言葉をそれ自身すでに一定の意味を持つものと考えている。我々は、その習得した言葉の構造に従って、様々な事柄を了解しているのでもある。

この言葉の二重性の意味を、ハイデッガーが確立した解釈学的現象学の方法で考察してみたい。

これらの問題の考察を通じて、ハイデッガーの哲学が投げかける深い問題——言葉と了解、思索と詩作——について少しでも近づいてみたいと考える。

我々は言葉を用いて様々な事柄を了解し、また了解した様々な事柄を言葉によって表現している。言葉が我々の了解や表現と深く関わっていることは確かに否定することはできない。しかし全ての了解や表現が言葉のもとで為されるとは限らないのであり、我々の了解や表現が言葉を用いることなく為される事柄も確かに少なくない。

周知の古典的なものではあるが、ヘレン・ケラーについての報告と彼女の自伝とは、言葉と了解の問題を考察する際、特に言葉を習得する前後の所で、この問題に対して貴重な例を示している。我々はこの報告から、彼女が言葉を習得する以前における「了解するということ」の可能性と、言葉を習得し、言葉の存在を了解してからの「言葉が存在し、言葉を了解することが出来るということ」を彼女が「了解したということ」の意味とを考察してみたい。

ヘレンの教師サリバンは、ヘレンが初めて言葉を了解したときの事を次のように記している。

「私たちはポンプ小屋へ行き、私がポンプを動かす間ヘレンに噴き出し口でコップを持たせておきました。冷たい水が噴き出し、コップからあふれ出したとき、私はヘレンの空いた方の手の平に〈水〉と綴りました。その言葉は彼女の手に激しく溢れる冷たい水の感覚と結びつき、彼女を驚かせました。彼女はコップを落とし、釘付けにされたように立っていました。新しい光が彼女の顔に現れました。……彼女は言葉を使い始めるや否や、以前使用していた合図や身振

りをやめました¹⁾」。

言葉の存在を突然知ったヘレンは、その後すぐに、近くにある手に触れるあらゆるものの名を教えてくれるようにサリバンに求めつづけている。ヘレンは、それまでも幾度も繰り返し、サリバンから指文字を教えられていたが、このとき初めて、突然、それが水を意味する言葉であることを了解したのである。ヘレンの手の平に触れる、サリバンの指の特定の感触を、指文字として、水を意味する文字として了解したのである。²⁾

通常の言葉の習得過程とは全く異なった、声を聴くことも、話すことも、文字を見ることもできない閉ざされた、言葉の無い世界から、言葉の世界が突然開かれたのである。これはヘレンが、サリバンによる手の平への指の触れ方の差異を、言葉を示す文字として了解することなしに、それ以前に、既に差異を差異として了解することができており、それが、突然、手に触れる冷たいものの意味を表現している言葉であることを了解したのである。またヘレンは、言葉を了解するまでも道具を使い、友人と遊び、母やサリバンにいろいろな要求を行い、家族と日常生活を営んでいたのであり、言葉によらない了解が可能であったといわねばならない。³⁾

ヘレン・ケラーについてのこの報告は、言葉を用いることのない状態での了解が可能であることを明確に示しているが、このような特殊な例でなくとも、我々は言葉によることなく、様々な事柄を了解している。芸術作品に感動するのも、言葉による説明がなくとも為し得る了解であり、その制作、創造も、言葉を用いない仕方での了解とその表現である。さらにより広くいえば耳に入る音を聞くのも、目に写るものを見るのも、切れ目のない空間の連続した像が目に見えていたり、多様な音が耳に入っているだけでなく、それらのもとで、ある事柄に注目し、注目された事柄を「その様なものとして⁴⁾」見て取り、あるいは多様な音の中から、注目している音を聞き分け、「その様なものとして」聞き取るのである。これは単に感覚器官に写り、響いているだけではなく、そのもとで、ある事柄に注目し、「その様なものとして」了解しているということを意味している。また泳げるようになったり、自転車に乗れるようになったりするのも、泳ぎ方、乗り方を了解しているといえるであろう。もちろんこれらの了解を、我々は言葉によって表現することは可能である。

「泳ぎ方」「乗り方」の様に、事柄それ自身が我々の体得によって為し得るものであるとき、この事柄の了解に限れば、「泳げない」ということが「泳ぎ方を了解していない」ということであり、逆に「泳げる」ということが「泳ぎ方を了解している」ということである。泳ぐという事柄は自分自身が為している事柄であり、その自分自身が為している事柄が為し得るのは、その事柄を自分自身で了解する、まさにその時からである。それゆえ体得という事柄において、我々は事柄それ自身を直接了解しているといえるわけである。そしてこの了解も言葉によってある程度表現できるのであるが、それを表現しようとするときには、我々は言葉の限界を思い知らされざるを得ない。

泳げない人を泳がせるために、泳ぎ方を説明しようとするとき、様々な説明が可能であるにもかかわらず、了解している「泳ぎ方」を説明し尽くすことは出来ず、泳げない人が泳げるようになるための説明は困難であり、最終的には泳げない人が自分自身で泳ぎ方を体得しなければならない。では泳げない人が泳げるようになる、体得するその時、泳げる人の了解している泳ぎ方の了解内容、つまりその意味が、泳げなかった人に了解されたのであろうか。そうではなく、泳げなかった人が、泳ぐという事柄を直接了解したのであり、体得したといわねばならない。泳げる人の説明は、せいぜい泳げない人にとって、我々は泳ぎ得るということの明示と、泳ぐことへの接近の仕方を明らかにすることでしかないであろう。

今考察している体得という了解の仕方は、了解される事柄が、了解するということによって、

了解する者に初めて可能になる、了解される事柄が、了解するものの為す事柄である。これを我々は「直接的了解」と呼ぶことにする。この体得つまり直接的了解は、了解の根源的な様態であり「そうだ、これなんだ!」「Das stimmt!」というような、それ以前とは断絶されたところで突然為され得る了解である。ハイデッガーが「了解は常に気分付けられている」(Verstehen ist immer gestimmtes.⁵⁾)と表現するのも、その“Stimmung”という根源的な様態を意味しているのである。⁶⁾

先に考察したヘレン・ケラーが言葉を了解した時も、彼女がそれまでその意味を了解する事なく「経験」していた、サリバンによる指文字を、突然言葉として了解したのである。それは手の平に触れる指の動きや、その触れ方を了解したのではなく、その動きや触れ方が意味を表現しているということを知ったのである。と同時に、事柄は言葉によって意味が表されており、その表されている意味を、彼女は「了解している」のであり、そのように「了解することが出来る」ということを彼女は「了解した」つまり体得、直接的了解を為したのである。そしてその時から彼女は、経験するあらゆる事柄の意味が了解出来るということを知ったのである。この体得があったからこそ、あらゆる事柄が言葉によってその意味を表すことが出来るということを知った彼女は、次々とサリバンに質問をし続けることができたのである。

それでは、了解される事柄が、了解することとは異なっている了解、つまり経験における——体得と区別するため我々はこれを経験と呼ぶが——了解はいかに為されるであろうか。経験において我々は、事柄それ自身を、体得のように直接了解することは出来ない。我々はその事柄を、それが示す通りに、「その様なものとして」了解する。その事柄を直接了解するのではなく、その事柄が示すもの、つまりその事柄が示す意味を、「その様なものとして」了解するのである。しかしこの経験による了解は、経験している事柄を、直接了解しているのではないため、その了解されたものが、事柄を十分に了解したものであるとは限らない。逆に、事柄は、様々に了解され得るのであり、経験されたある了解を、事柄それ自身と同一視することは、事柄それ自身を覆い隠すものでもある。事柄と了解との間には差異があり、この差異によって了解が可能となっていることに注目しなければならない。

このことは「その様なものとして」という、拙論で繰り返し用いられている用語が意味していることでもある。「その様なものとして」了解することは、事柄それ自身をではなく、事柄の示すものを、つまり事柄の意味を了解するということである。事柄それ自身が示す通りにその意味を了解しながら、そこに事柄それ自身との差異が存在する。事柄それ自身は、多様に了解され得るのであり、あらゆる了解の仕方は、多様な了解可能性の内の可能なものとなった了解である。この了解は、事柄それ自身が示す通りに、それに従っているのであるが、それはまた、その事柄の多様に了解され得るすべてが、その事柄の示す通りに、それに従っているのであり、ある了解は、その内の可能となったものでしかない。これらの多様な了解をすべて為し尽くすことは、有限な我々には不可能である。事柄それ自身と、その事柄の、ある了解との間には差異があり、この差異は、了解を、有限な我々が為すことに存しており、逆に有限な我々は、この差異が存在し得ることによって、初めて了解する事が出来るのである。いわば我々に、事柄それ自身に入り込み、関係することが出来る開かれた領域が与えられるのである。つまり「その様なものとして」という表現は、事柄それ自身と事柄の意味の了解との差異を表しており、それゆえこの用語は直接的了解、体得には用いられることはない。

我々の了解は、それが明確な了解であれ、漠然としたものであれ、あるいは具体的な事柄についてであれ、抽象的な事柄についてであれ、ある事柄に注目し、その事柄の意味を「その様

なものとして」了解しているのであり、無限定なもの、あるいは統一されていない多様なものを一挙に了解することは出来ない。事柄についての了解は、「その様なものとして」定められ、分節されることによって、初めて為し得るということが出来る。了解と分節の関係は、了解されるもの、つまりその事柄の意味が分節されているということだけではなく、分節されることによって了解が為され得るということも意味している。つまり了解それ自身がその事柄の意味の分節構造を成しているということである。分節とは、ただ個々別々に分離することや、バラバラに分解することとは区別しなければならない。我々の了解は個々バラバラなものの単なる寄せ集めではなく、個々のものが、統一的な全体のもとに収集され成立しているのである。ここでいわれる分節とは、それゆえ、全体のもとに収集しつつ、位置づけるということの意味している。

了解した事柄の意味を思索し、あるいはそれを表現するとき、我々は言葉を用いている。言葉は事柄の意味、つまり了解の分節構造を示すことが出来るものでなければならない。逆に言えば、言葉の構造は、了解の分節構造に基づいているということができる。

言葉ということが言われるとき、我々は日常的に、文字や音声のことを考えてしまうことが多い。しかし言葉は文字や音声ではない。確かに言葉は文字や音声として示されるが、言葉が単なる音やインクのみでなく意味の分節構造を示すがゆえに、音声や文字が言葉として了解されるのである。より詳しく言えば、音声や文字が言葉として了解されるのは、我々が、それらのものを、意味の分節構造を示していると了解できるからである。それゆえ他の何かが、言葉の分節構造を示すことが出来れば、たとえば指文字や点字も言葉として了解出来るのである。⁷⁾

言葉を用い、思索し表現するのは、それを為すことが可能である者のみが、為し得ることである。そうすることを可能とする可能性、この可能性は、思索し、表現している我々自身の存在の仕方にもとづくものである。我々の存在の仕方にもとづいて、言葉を了解し使用することができる可能性は実現され、可能なものとなっている。

しかしまた我々は、言葉を習得することによってのみ、それを自己のものとする事ができるのである。我々は言葉を了解して使用する可能性を持つものであるが、その可能性を実現するためには、言葉を習得しなければならない。習得されるという面で、言葉は経験される事柄であり、それは「その様なもの」つまりその様な意味を持つものとして、我々に与えられている。逆に言葉がたとえ与えられていてもそれを「了解することが出来る」ということを、言葉を了解する前のヘレン・ケラーのように、「了解する」ことがなければ、我々は言葉を習得することは出来ない。ここに言葉の二重性が明かとなる。

我々が「言葉を了解し使用する事が出来る」ということを「了解する」というこの了解は、ヘレン・ケラーの様な特別な場合以外は、反省される以前に既に為されてしまっている。つまり了解しようとする前に、既に了解してしまっている。言葉を了解することが出来るという了解は、直接了解、体得されるものであり、言葉を用いることを可能とするもの、つまりその可能性は、我々の、了解することが出来るという存在構造に基づいているのである。しかしこのことは反省されにくく、それ故、言葉の二重性が無視あるいは軽視され、言葉は経験されるものとしてのみ扱われやすいものになってしまう。

言葉が経験対象として扱われるとき、言葉によるある事柄の表現が、その様に何かある事柄を表現している言葉となり、言葉そのものが一つの事実的な事柄になってしまう。つまり「言葉によって示されるものがある事柄である」という事が取り出されることになる。こうして取り出された言葉は、常に一定の意味を表すものとして固定的に取り扱われるものとなる。

もし言葉が一定の、あるいは固定的な意味を持つものでなければ、我々が言葉を習得することは、足場のない宙に浮いたものとなり、不可能であるだろう。この言葉の形式化・固定化によって、初めて我々は言葉を習得することが出来るのである。言葉がこうして固定的なものとされるということは、ある種の不変性を保持する存在者として言葉を扱うことが出来るようになるということである。この不変的に一定の意味を表すものとして了解された言葉は、その構造が、言語構造の論理的形式という形式的絶対性を持つものとして絶対化され、ある種の絶対的なものとされた言葉は、事柄の意味の分節構造を、その不変化・絶対化された言葉の構造へと限定するようになる。つまりある事柄について了解しようとするとき、言葉の意味、構造に従って事柄が了解されるということである。

事柄の意味に従う了解の分節構造と、それを表現する言葉の構造という関係が逆転し、言葉の構造が、絶対化された確実なものとなり、言葉の構造に従って推論が進められ、事柄の、言葉の構造に従った了解が確実なものとなるのである。しかしこの了解は、先に考察した通り、事柄の意味を十全に了解するものではなく、事柄の意味を隠すものであり、有限な限界付けられたものであることは常に注意されねばならない。それにもかかわらず、言葉はその有限性をさらに限定し、固定的で扱いやすいもの、常に一定の固定的な意味を表すことが出来るものとなり、このことによって我々は言葉を習得することができ、さらに言葉による相互の対話を為すことが出来、了解した事柄を他者に明示することが出来るのである。

事柄の意味を、事柄の示す通りに了解しない、すなわち事柄のもとに留まりつつ了解するのではなく、事柄が言葉という道具によって説明される対象とされ、我々はその道具を使用し説明する主観となる、この主観—客観関係の中で、了解が固定化・形式化された言葉という存在者によって構成されるのである。

言葉の構造に従って、事柄を了解し表現・構成するこの固定的なものとした言葉の中で、最も抽象化・形式化されたものとして、数学言語がある。現代の科学文明は、この最も形式化・絶対化された数学言語に従うものであり、その了解の仕方が限界付けられ定められることによって、数学言語を確実なものとして自己の基盤と為すことが出来ると確信している。この数学言語を基盤とする自然科学の言語に従って了解され構成された、事柄の意味の体系は、言葉の形式的確実さによって、確実な事実と考えられるようになる。

この様な了解の仕方では了解された世界についての了解を、ハイデッガーは世界像と呼んでいる。「近世の根本的な出来事は、像として世界を征服してゆくことです。像という言葉はいまや（前に立てながら・こちらに立てるといふ・形像）を意味しています。この形像において人間は、全ての存在するものに尺度を与え且つ準繩を引くような、その様な存在するものでありうるための地位を目指して闘うのです。」⁹⁾ 事柄の意味を、我々は言語形式と言う道具を使って構成し、像として征服するのである。「世界像とは、本質的に解すれば、それゆえ、世界についてのひとつの像を意味するのではなく、世界が像として捉えられていることをいうのです」「わたしたちは世界像をば、世界それ自身、おしなべて存在するもの、あたかもそれが、わたしたちにとって基準的であり且つ拘束力あるもののように思っています⁹⁾」とハイデッガーはいう。「存在するものが世界像となるばあいに、存在するものについて全体として、本質的な決定がおこなわれるのです。存在するものの存在は、存在するものが表象されてあること（Vorgestellt = 前に立てられてあること）において、探究され且つ見いだされる」¹⁰⁾ のである。つまり存在するものが、前に立てられ、表象として構成された像となるのである。世界の現に存在している存在の仕方の中で、我々は了解することが出来る存在者として存在しているのであるが、その世界が、逆に言語体系の形式に従って、限界付けられ、確実な事実の体系と

して表象され、構成されていることを、この世界像という言葉は意味している。そしてこの世界像が支配する現代を、ハイデッガーは世界像の時代と呼んでいるのである。この像としての事柄の了解は、事柄それ自身が示す通りのものを隠し、主観によって構成され、限界付けられたものとなってしまふ。

事柄の意味を了解する了解の分節構造を、言葉がその構造において示すということと、逆に言葉の構造が事柄の意味を構成するということとの言葉の二重性において、言葉の構造形式の限界に支配された事柄の意味の構成的了解を、事柄それ自身へと向け直し、言葉の形式に従う思考や表現のありかたを逆転し、事柄それ自身の示す通りに記述する現象学的方法をハイデッガーはフッサールから学んでいる。

ハイデッガーは、フッサールの現象学における「事象そのものへ」という態度変更を出発点として、彼の思索を開始した。¹¹⁾ハイデッガーの初期の、また彼の主著である『存在と時間』は、それゆえ解釈学的現象学の遂行であるといひ得る。現象学は「事象それ自身」に従って、その示すところを、示す通りに了解、解釈していくことを遂行する学であり、それゆえ解釈学である。ここでいう解釈学は伝統的なテキスト解釈の学ではなく、事柄それ自身を、事柄が示す通りに了解してゆく学ということであり、解釈学と現象学とは同じことを意味し、解釈学的現象学とは現象学の意味を明確に示したものであるといひことができる。

しかし「事象それ自身を」その示す通りに了解し解釈する方法も、それを記述するときには、言葉の構造という固定的な形式に限界付けられてしまっていると言わねばならない。

ハイデッガーは、言葉の固定的な形式の限界から、さらにより事柄それ自身を示すことができるものを求め、思索すること（Denken）から、詩作すること（Dichtung）という、より深い、言葉にまだ手垢がつかず、固定化されていないところへと向かおうとする。

ハイデッガーによる了解についての考え方は、言語形式に従う論理的な了解と、詩作の言葉による了解との二つに分けて考えられている、とする捉え方が広く行われているが、それは我々にとって不十分なものであるといわねばならない。ハイデッガーは、言語形式に限界づけられている言葉による了解を、単に越えて、詩作の言葉によれば、事柄それ自身が示す通りに了解が可能であるとは考えていない。

「以前、わたしは、ずいぶん不器用な言い方ですが、言葉を存在の家と呼んだことがあります。人間が、その用いる言葉を通じて存在の要請のなかに住んでいるとするなら、われわれヨーロッパ人は、おそらく東アジアの人とはまったく別の家に住んでいるのでしょうか¹²⁾」と彼がいうとき、西洋の言葉と東アジアの言葉、ここではドイツ語と日本語というそれぞれの言葉の固定的な形式に我々は限界づけられていることを、彼は確認している。

我々が習得し、使用している言葉は、各言語として存在しているのであり、それぞれがその言語に特有の形式化、固定化が為されているのである。この言葉の限界を越えて、事柄それ自身について語ることの限界を認めた上で、西洋の言葉と東アジアの言葉が「対話をするようになり、そのとき或る唯一の源泉¹³⁾」として、まだ適切な言い表しではないとことわったうえで、それまで表明されたことのない言（Sage）についてが語られるのである。

ここで語られる言（Sage）とは、もはや、言語形式に従う言葉や、詩作の言葉を意味しているのではない。

事柄それ自身が示すその意味を、我々は「その様なものとして」了解することができるのであるが、それは、事柄それ自身が示すものを、いわば聞き取ることによって為されるのである。この示すものを聞き取るといわれるとき、我々は沈黙の声を聞き取るといわねばならない。

言（Sage）とは「現れさせ、かがやかせる、けれども、そのことを（めくばせする、かる

く合図する)というやり方です。そのような意味での(示す)ということとおそらく同じでしょう¹⁴⁾とハイデッガーは語るのである。「それでは、言(Sage)とは、(人間がものをいうこと)をあらわす名称ではないのですね」という問いにハイデッガーは「そのとうりです」¹⁵⁾と答えている。言(Sage)は、もはや我々の言葉を意味せず、我々はただ、その言(Sage)を聞き取ることに努めねばならないのである。

我々が言葉によって思索し、表現するとき、その言葉は、一定の固有な意味をしめすものとして習得されたものである。しかしそれは同時に、事柄が示すものを了解する、了解の分節構造に基盤を置くものでもあった。この言葉の二重性に気づかず、あるいは軽視し、言葉の形式化された意味で、事柄の意味を構成し、説明するという扱い易さに甘んじている限り、事柄それ自身は我々に隠され、有限で常に途上にある我々は自分自身をも誤認することとなるであろう。言葉の二重性を常に注意しつつ、我々は言葉の有限性のもとで、その可能性へと開かれた者として、我々に示される事柄の意味を了解することに耐えて行かねばならない。

Zusammenfassung

Wir können den Sinn von vielen Sachen verstehen, mit der Sprache sie denken und aussagen. Die Sprache zeigt deshalb die Struktur von Sinn und Verstehen.

Wenn wir die Sprache lernen, denken wir aber die Sprache, die schon immer bestimmten Sinn hat. Wir verstehen auch gemäß dieser verstandenen Sprache viele Sachen.

Ich möchte auf der Methode der hermeneutischen Phänomenologie den Sinn dieser Zweiheit der Sprache betrachten.

Durch diese Betrachtung möchte ich an die schwere Aufgabe, die Heideggers Philosophie vorschlägt, an die Sprache und das Verstehen, an das Denken und die Dichtung denken.

注

1) Helen Keller "the Story of My Life" (New York, 1903) supplementary Account of Helen Keller's Life and Education, pp.315 ff.

2) 『わたしの生涯』ヘレン・ケラー(角川文庫) pp.30f.

3) しかしまたヘレンは、言葉の世界を知る前に、彼女が壊した人形に何の感情も持たなかったが、15分足らず後のことであろう、言葉を了解した彼女は、涙を流しながら壊した人形を拾い集めている。これは言葉・意味の了解が、感情の現れと深く関わっていることを示すであろう。

注6「了解は気分づけられている」参照

4) 63ページ参照

5) M.Heidegger "Sein und Zeit" 11.Aufl., Tübingen 1968. S.142 以後SuZと略記

6) ハイデッガーは、もっと広い意味で、現存在が世界=内=存在として世界へと開かれている、その開け全体をも気分づけられていると考えている。

Vgl. SuZ. § 29~§ 34

7) Vgl. M.Heidegger "Heraklits Lehre vom Logos" aus Gesamtausgabe Bd.55 S.215f.

8) M.Heidegger "Die Zeit des Weltbildes" aus "Holzwege" S.87以後ZdWと略記。

9) ZdW. S.82

10) ZdW. S.82

- 11) Vgl.SuZ. S.38
- 12) M.Heidegger "Aus einem Gespräch von der Sprache, Zwischen einem Japaner und einem Fragenden" aus "Unterwegs zur Sprache" S.90 以後 JuF と略記
- 13) JuF. S.94
- 14) JuF. S.145
- 15) JuF. S.145
(ZdW, JuFの訳は主として理想社「ハイデッガー選集」に従う)